

フッサールの学問論的転回点

堀 栄造

本論は、まず、フッサールが初めて学問論を体系的に展開した1912年の『イデーⅢ』における学問論を考察し（第一節）、次に、フッサールが初めて実在的な諸学問についての学問論を具体的に遂行した1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論を考察し（第二節）、さらに、フッサールの最晩年の集大成の書である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（『危機書』、1936年）における学問論との対比において、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論の意義を考察する（第三節）。

（1）『イデーⅢ』における学問論

フッサールは、『イデーⅢ』においてその核心的思想に関して次のように述べている。「とりわけ見逃されてはならないことは、一方に存する自我および身体の構成と他方に存する実在的事物性の構成との絶えざる相互関係であり、また高次の段階では、一方に存する人間および人間的諸社会の、諸精神の、共同体的諸認識や共同体的諸価値評価や共同体的諸意欲を伴う精神的諸共同体の構成と他方に存する自然および文化的世界としての客観的世界の構成との絶えざる相互関係である」⁽¹⁾。つまり、1912年の『イデーⅢ』の時点のフッサールにとって、最大の関心事は、自我および身体の構成と実在的事物性の構成およびそれらの相互関係であり、高次の段階では、人間および人間的諸社会の構成と自然および文化的世界としての客観的世界の構成およびそれらの相互関係である。したがって、『イデーⅢ』の主題は、自我・身体・事物およびそれらを包含する世界の構成だということになる。

構成の現象学的本質は、構成される側の本質と構成する側の本質の相関である。それゆえ、『イデーⅢ』におけるフッサールは、構成される側の本質つまり自我・身体・事物およびそれらを包含する世界の本質の探究を「存在論的考察」と呼び、構成する側の本質つまり超越論的構成作用の本質の探究を「現象学的構成的考察」

と呼ぶ。そして、フッサールは、『イデーⅢ』において次のように述べている。「存在論的考察の仕方は、いわば地籍簿的 [katastematisch] である。それは、諸統一体をその同一性において捉え、その同一性のために固定的なもののように捉える。現象学的構成的考察は、統一体を流れにおいて捉えるのであり、つまり、構成する流れの統一体として捉える。現象学的構成的考察は、そのうちではそのような統一体およびそのような統一体のあらゆる成素、側面、実在的特性が同一性の相関者であるような諸運動や諸経過を追求する。こうした考察は、いわば運動的 [kinetisch] ないし〈発生的 [genetisch]〉である。この場合の〈発生 [Genesis]〉は、自然的発生や自然科学的発生とは全く異なる〈超越論的〉世界に属する」⁽²⁾。ここで、フッサールは、存在論的考察は、諸統一体としての構成される諸存在者およびそれらを包含する世界を地籍簿的に捉えるのに対し、現象学的構成的考察は、運動的ないし発生的に超越論的構成作用を捉えるのだと、相関する両者を対比的に説明している。それでは、存在論と現象学の関係は、どのような関係であるべきかというのだろうか。

フッサールは、存在論と現象学の関係について『イデーⅢ』において次のように述べている。「存在論に関して、誰かが完全な洞察を実際に遂行し、例えば精神の本質や自然の本質を純粹に完全に説明し、それらに属する公理的諸原理を確定するということは、非常によく考えられる。しかし、事実上、数学において我々にとってうまく成功していることが、実在的諸存在論 [die realen Ontologien] においては同じ仕方で成功するというふうにはなっていない。ここで、現象学が、完全に見ることへと初めて我々を教育する。そして、現象学が得ようと努力するものは、諸実在性の本質論ではなく、諸実在性の構成の本質論であり、他方で、純粹自我および自我意識一般の本質論であるにもかかわらず、まさに現象学との共同作業においてのみ、実在的なものそのものの完全な本質把握と、まさにそれとともに範疇的諸概念および諸根本原理に従う存在論の基礎づけが、成功する」⁽³⁾。フッサールは、存在論が数学の分野における存在論のように部分的には成功しているが、精神や自然を初めとする諸実在的の分野においては成功しておらず、そうした欠陥を克服して補完するものが現象学であることを説いている。そして、フッサールは、現象学が諸実在性の本質論ではなく諸実在性の構成の本質論であることを際立たせ、そうした現象学との共同作業によってのみ実在的なものそのものの完全な本質把握および

存在論の基礎づけに成功することを説いている。そうすると、存在論と現象学の関係は、現象学によって存在論が基礎づけられるという関係だと言える。そして、存在論を基礎づける現象学の資格は、現象学が諸實在性の構成の本質論である点に存するものと言える。したがって、諸實在性の構成の本質論としてのフッサールの現象学的存在論は、精神や自然を初めとする諸實在的分野を包括するような普遍的存在論を標榜するものである。

『イデーⅢ』におけるフッサールの存在論は、学問論的色彩を帯びる。そこで、フッサールは、『イデーⅢ』において次のように述べている。「そこには、一切の存在論の超越論的解釈もまた属するであろう。そうした解釈は、現象学的方法によって遂行されるべきであるようなあらゆる存在論的根本命題の解釈であり、学問的洞察の方法によって自己に組み込まれるべき超越論的意識の特定の諸連関全体に対して指標 [Index] となるようなあらゆる存在論的根本命題の解釈である。他方で、可能的経験作用および思惟作用の連関における経験可能な諸實在性の構成の理論によって、あらゆる経験的真理も、あらゆる種類の経験的諸科学のあらゆる命題も、ならびに、経験科学的諸認識における〈それに関して問われる対象 [Gegenstand worüber]〉であるあらゆる実在的存在者そのものも、超越論的諸連関にとっての指標となるということが、示されるのである。……諸存在者の諸学問、合理的および経験的諸学問（それらの諸学問が〈構成〉の諸統一体へ向かうということが示されるかぎり、それらの諸学問は拡張された意味で一切の〈諸存在論〉と呼ばれうる。）が我々に提供する一切のものは、〈現象学的なものへ解消される〉」⁽⁴⁾。ここで、フッサールは、「一切の存在論の超越論的解釈」について語っている。つまり、存在論的領域の基底には超越論的意識の領域が組み込まれるべきであり、裏返せば、存在論的領域は超越論的意識の領域の指標となるということである。それゆえ、存在論は、現象学によって超越論的に基礎づけられることになる。そして、存在論的領域は、可能的経験作用および思惟作用の連関における経験可能な諸實在性の領域であるわけだから、存在論的領域の諸存在者の学問としての合理的および経験的諸学問も、現象学によって基礎づけられることになる。したがって、諸存在者の学問としての合理的および経験的諸学問は、拡張された意味での諸存在論として現象学的なものへ解消されると言われうるのである。

フッサリアーナ（フッサール全集）第32巻『自然と精神 — 1927年夏学期講

義』の編者であるとともにフッサリアーナ資料集第4巻『自然と精神 — 1919年夏学期講義』の編者でもあるミヒャエル・ヴァイラーは、『『イデーⅡ』』においては学問論的観点で自然的態度の諸学問が究明の対象の役を演じたけれども、同様に、フッサールの死後ようやく公刊された『イデーⅢ』』においては、現象学と諸学問の基礎、もっと厳密に言えば、現象学と心理学あるいは存在論の関係の解明が問題である」⁽⁵⁾と述べている。確かにミヒャエル・ヴァイラーの言うとおり、『イデーⅢ』の学問論は、現象学と心理学あるいは存在論の関係を問題にしている。

フッサールは、現象学と心理学あるいは存在論の関係については、『イデーⅢ』において次のように述べている。「しかし、実際には、ごくわずかの存在論しか構成されておらず、よく言われるように、その理由は、学問としての存在論の有能な形成が、もとより、例外的にしかつまり或る種の部門の本質の場合にしか比較的容易に成し遂げられえないような直観 [Intuition] の完全性を要求するからである。事実上この事と連関するのは、すでにかなり昔から幾何学と一部の形式的論理学と数学が発展したということであり、しかし今日まで（まさによりやく成立して理解される心理学的現象学へ至るまで）物質的自然の存在論 [eine *Ontologie der materiellen Natur*] と合理的心理学 [eine *rationale Psychologie*] が欠落しているということである」⁽⁶⁾。フッサールによれば、存在論は、歴史的に見て幾何学と一部の形式的論理学と数学くらいしか展開されておらず、物質的自然の存在論と合理的心理学が欠落している。そこで、フッサールは、主として1912年から1918年へかけて『イデーⅡ』』において物質的自然の存在論と合理的心理学を実際に遂行したものと言えよう。

合理的心理学とは、心理学的存在論のことであり、物質的自然の存在論と並ぶものである。フッサールは、合理的心理学ないし心理学的存在論について『イデーⅢ』』において次のように述べている。「合理的心理学は、体験連関において構成される実在的なものの存在論として捉えられねばならないのであり、体験連関そのものの本質と一致しえないということを我々は容易に洞察しうるであろうが、それは、我々が実在性一般の理念のように心的実在性の理念を解明し、心的実在性および自我的実在性に対する古くからの不信感を放棄したのちのことである。現象学と心理学的存在論 [psychologische *Ontologie*] の注目に値する関係は、現象学を心理学的存在論のうちへ組み込むことを許容し、或る一定の仕方でもた再び心理学的存在論

を一切の存在論的諸学問と同様に現象学のうちへ組み込むことを許容するのであり、我々を詳細に取り組ませるのであろうが、我々は、そうした現象学との並行関係を精神の存在論 [die Ontologie des Geistes] に対して洞察することを分たせらるであらう」(7)。体験連関において構成される実在的なものの存在論としての合理的心理学(心理学的存在論)は、一切の存在論的諸学問と同様に現象学によって基礎づけられるものであり、物質的自然の存在論や精神の存在論と並存するものである。したがって、1912年の『イデーⅢ』における学問論は、物質・心・精神といった実在的な存在論的領域を構成的現象学によって基礎づけるという構図を設定するとともに、それぞれの実在的な存在論的領域に存立する実在的な諸学問を現象学によって超越論的に基礎づけるという枠組みを確定したものとと言える。そして、物質・心・精神といった実在的なものについての存在論は、主として1912年から1918年へかけて執筆された『イデーⅡ』において具体的に遂行されたが、それぞれの実在的な存在論的領域に存立する実在的な諸学問についての学問論は、具体的に遂行されることはなかった。実在的な諸学問についての学問論が具体的に遂行されるのは、1919年夏学期講義「自然と精神」において初めてのことである。それゆえ、本論は、次節で1919年夏学期講義「自然と精神」を吟味検討しなければならない。

(2) 1919年夏学期講義における学問論

1919年夏学期講義「自然と精神」において、フッサールは、自然と精神の区分に応じた可能的諸学問の根本種類が存立する存在論的領域の基本的構造に関して次のように述べている。「我々は、可能的世界一般の本質的にすでに分岐した類型を所有しており、自然と精神(あるいは、あなたが望むなら、文化)に応じた分岐ないし本質的成層をもっている。ここで、さらなる意味で理解される自然の側では、我々は、物的自然 [physische Natur] と心的自然 [psychische Natur] の区別をもっており、その際に、心的自然という題目は、一切の主観を単なる実在として含む。心的自然は孤立しているのではなく物的身体性 [physische Leiblichkeit] とのみ結びついて現れうるものであり、それゆえ物的自然の上への積み上げだけが可能であるということに我々がすでにあらかじめ気づいているかぎり、我々は、心的なもの

を、必然的に心的で物的な二重の実在における層としてもつ。それゆえ、その事は、あらかじめ、経験的の学問であれアприオリな学問であれ、可能的諸学問をもたらす」⁽⁸⁾。フッサールは、可能的諸学問の根本種類が存立する存在論的領域の基本的構造を、基底に据えられる「物的自然」、その上に積み上げられる物的身体とのみ結びついて現れうる「心的自然」、さらにその上に積み上げられる「精神（文化）」という成層構造と見ている。

したがって、1919年夏学期講義「自然と精神」において、フッサールは、存在論的領域の基本的な成層構造を踏まえて、可能的諸学問の根本種類に関して次のように述べている。「さしあたり、(A) 自然諸科学。(1) 通常の意味でのその語は、事実学 [Tatsachenwissenschaften] を意味し、あるいは同じ事だが、この場合アприオリに必要な認識方法に従って言えば、経験的自然諸科学を意味する。そのような学として、我々は、次のようなものをもつだろう。(a) 拡張された語義での経験的物理学としての物的自然の経験的諸科学、(b) 心的および心的物的自然についての経験的諸科学。(2) しかしまた、他方で、あらかじめ必然的要請としてアприオリな諸学問をもつだろう。そうした諸学問は、少なくとも自然の空間形式や時間形式の側面から幾何学や純粋時間論や純粋運動論が形相的本質をもたらすように、諸学問分野におけるアприオリな原理（公理）およびそのうちに理論的演繹的に含まれる諸帰結に従って物的自然、心的自然、心的物的自然の形相的本質を説明する。…… (B) 次いで、〈文化〉という題目、精神としての主観性、そして精神的能作を遂行するものとしての主観性、そして精神的能作そのものが、客観的形成体としてその一切の可能的形成から見て問題となるだろう。その際に、人格性および人格的形成体から見た可能的精神性の輪郭を描かれるべき特有の類型に依拠して、可能的経験的精神諸科学の諸類型の地平が、要請として再び開かれる。そして、第二に、諸学問分野における対応するアприオリをもまた説明するようなアприオリな精神諸科学の要請は、もちろんまた、それなしには精神的な主観性および精神的形成体が考えられえないようなものであり、そのうちで一切の精神科学的経験が必然的のみなされるようなアприオリな枠組みを示すものであり、あるいは、同じ事だが、一切の経験的学問がその下に屈服せざるをえないような規範体系である」⁽⁹⁾。フッサールの可能的諸学問の根本種類に関する分類によれば、可能的諸学問は、まず、自然諸科学と精神諸科学に大別される。そして、自然諸科学は、物的自然や心的および

心的物的自然についての経験的諸科学と、物的自然や心的および心的物的自然についてのアприオリな形相学つまり自然の領域的存在論に区分される。さらに、精神諸科学は、経験的精神諸科学とアприオリな精神諸科学つまり精神（文化）の領域的存在論に区分される。

したがって、1919年夏学期講義「自然と精神」におけるフッサールの学問論は、可能的諸学問をアポステリオリな経験的諸科学とアприオリな形相学としての領域的存在論に区分し、前者の骨格を成す后者を現象学によって超越論的に基礎づけることによって、厳密な学問体系の創立を企図するものと言えよう。

その事を裏付けるように、フッサールは、1919年夏学期講義「自然と精神」の序文の結びの言葉として次のように述べている。「本講義は、哲学的講義として、絶対的存在に向けられる。つまり、絶対的存在とは、学問の媒介によって究極的源泉へ遡行するような世界認識のことである。しかしまた、そうした世界認識は、前学問的意識と学問的意識を結びつけるような本質存在性の認識において、それなしには学問が決して理解されえないような前学問的意識の所与性をすでに主題化する。精神においてより一層高次の段階でそして最後には自然科学的に客観化されるような自然が、我々の研究対象となるはずであり、また、個人的精神および社会的精神として文化的世界としての精神的環境世界を形成し自己自身をそのうちで展開するとともに、他方でしかしまた、精神として自然の中に外化され自然科学的テーマとなるような精神が、我々の研究対象となるはずである。そして、我々は、哲学者として、自然と精神を源泉に基づいて結びつける究極的統一へ、そしてそれとともに理論的にも実践的にも我々に前以て定められている世界定位へ絶えず視線を向けてしまおうと思う」⁽¹⁰⁾。フッサールが明言しているように、1919年夏学期講義「自然と精神」の眼目は、学問の媒介によって究極的源泉へ遡行するような世界認識である。究極的源泉とは、自然と精神が結びついた究極的統一としての世界定位の源泉であり、世界を構成する超越論的主観性である。それゆえ、学問の媒介によって究極的源泉へ遡行するということは、自然と精神に関するアポステリオリな経験的諸科学の骨格を成すアприオリな形相学としての領域的存在論を指標として出発し、それからそうした学問的意識の基盤を成す前学問的意識を主題化する現象学（現象学的心理学ないし形相的心理学）へ遡行し、最終的には超越論的主観性を主題化する現象学（超越論的現象学）へ遡行することを意味する。

それでは、1919年夏学期講義「自然と精神」において、フッサールは、学問論的分析を具体的にはどのように展開したのか。フッサールは、物的自然の存在論および現象学の基本路線について詳細に論述している。

1919年夏学期講義「自然と精神」において、フッサールは、アприオリな形相学としての物的自然の存在論に関して、「感性論的諸形式の感性論的理論」と「実在的個性性の形式的感性論的理論」を峻別して次のように述べている。「我々は、〈物的自然〉という事象的形相の大地に立つ。それというのも、我々の〈自然〉という形相の感性論的に際立たされたユークリッド的多様体の内部での実在的物的個性化としての個性化のアприオリな特殊な諸条件が、問題であるからであり、我々は、さしあたり、〈自然〉という形相を、我々が感性論的充実の諸類つまり色・リズム・熱等々の諸質を未規定のままにしておくことによって一般化して考える。感性論的諸形式の感性論的理論と並んで、実在的個性性の形式的感性論的理論 [die formal-ästhetische Theorie der realen Individualität] は、こうしたアприオリを研究する。しかし、これまで形成されたアприオリな自然科学的諸学問は、感性論的諸多様体およびその諸形式に関係づけられているのみであり、純粹幾何学、純粹時間論等々である。私が言ったとおり、物的個性性の感性論的形式的理論 [eine ästhetisch-formale Theorie der physischen Individualität] が、欠落している」⁽¹¹⁾。フッサールによれば、従来のアприオリな自然科学的諸学問は、自然という形相の感性論的に際立たされたユークリッド的多様体およびその諸形式に関する純粹幾何学や純粹時間論等々の「感性論的諸形式の感性論的理論」であり、「物的個性性の感性論的形式的理論」としての「実在的個性性の形式的感性論的理論」は、欠落していたと言わざるをえない。

そこで、フッサールによって「物的個性性の感性論的形式的理論」としての「実在的個性性の形式的感性論的理論」を含意するものとして導入されたものが、「ファントムの体系的存在論」である。それに関して、フッサールは、1919年夏学期講義「自然と精神」において次のように述べている。「我々が因果性に対して目をつぶると、— 根源的に与える経験の相関者として絶えず純粹に考察されるならば — 事物について何かが残存するのであり、或る具体的なものが残存するのである。すなわち、狭義の超越論的感性論の事物 [das Ding der transzendentalen Ästhetik in einem engeren Sinne] が、残存するのであり、純粹な感性的事物 [das pure

Sinnending] が、残存するのである。おそらく気づかれるであろうが、それは、実在的事物の或る単なる層 [eine bloße Schicht des realen Dinges] であり、我々がその語を自然に取り上げるとき、事物 [Ding] という名称に値しないのであり、それというのも、事物という名称の場合、因果的諸属性をもつような物質的実在性 [die substantielle Realität] が意味されるからである。我々は、こうした具体的下層 [konkrete Unterschicht] を具体的事物ファントム [das konkrete Dingphantom] とも呼ぶ。それに対応するものは、経験の側から言えば、事物直観 [Dinganschauung] (感性的直観的经验 [sinnanschauliche Erfahrung]) という狭義の閉じた概念であり、知覚という概念でもある。……諸ファントムおよびその下にある諸図式は、実際に、経験の具体的統一である。そして、あらゆる外的事物経験において、ファントムおよびその下にある諸図式は、或るアプリアリに必然的な下層である。ここに、ファントムの体系的存在論 [eine systematische Ontologie der Phantome] という課題が、明らかに生じるのであり、幾何学および純粹運動論が空虚な図式という側面から見てファントムの体系的存在論に属するということは、明らかである。その場合、相関的に、ファントムの体系的現象学 [eine systematische Phänomenologie der Phantome] が、要求されるのであり、そして、含蓄のある意味での超越論的感性論 [die transzendente Ästhetik im prägnanten Sinn] が、それに対する名称となろう⁽¹²⁾。ファントムは、根源的经验の相関者であり、事物直観 (感性的直観的经验) の相関者であり、知覚の相関者である。それは、客観的認識対象のように明確に把握された対象ではなく、いわば五感を通じて漠然と知覚される対象である。そして、ファントムの質料を度外視してファントムを主題化する幾何学や純粹運動論等々は、ファントムの体系的存在論の一郭を成すのであるが、それらは、従来の「感性論的諸形式の感性論的理論」である。それに対して、フッサールによって「物的個性の感性論的形式的理論」としての「実在的個性の形式的感性論的理論」を含意するものとして導入されたファントムの存在論とは、質料を具えた実在的事物の或る単なる層ないし具体的下層としての具体的事物ファントムの存在論である。具体的事物ファントムは、根源的经验・事物直観 (感性的直観的经验) ・知覚の相関者として超越論的現象学によって捉えられるものであるから、質料のない空虚なファントムとは峻別して「狭義の超越論的感性論的事物」ないし「純粋な感性的事物」と言われうる。それゆえ、具体的事物ファントムの存在論は、

物的自然のアプリオリな形相学としての領域的存在論と現象学的心理学（形相的心理学）・超越論的現象学の架け橋だと言える。そして、フッサールは、このように「存在論と現象学の架橋」としての役割を果たすものを「超越論的感性論」と呼ぶのである。

（3）学問論的転回点としての1919年夏学期講義

ミヒャエル・ヴァイラーは、1919年夏学期講義「自然と精神」に関して、次のように述べている。「この講義において歩まれた道を以て、少なくとも発端から見、フッサールのデカルト的道に代わる、学問批判および経験的世界の存在論に関する現象学入門の道もまた、初めて体系的に開始されるのであり、それゆえ、その道は、1926/27年冬学期講義「現象学入門」を以て初めて着手されるわけではない。〈存在者の普遍的学問をどのようにして基礎づけるのか〉、〈自然と精神のように〉混乱した学問的根本概念を〈純粹に経験の世界としての世界の普遍的構造に関する考察〉から出発してどのように解明しうるのか、といった主導的問題を手がかりにして、その軌跡が『危機書』へ至るまで追跡されるようなこうした現象学的学問入門講義の歩みの主要段階を成すものが、もはや、1919年の講義の体系的道標でもある」⁽¹³⁾。ミヒャエル・ヴァイラーの言うとおりに、1919年夏学期講義「自然と精神」は、『イデーニI』（1913年）において歩まれたようなデカルト的道つまり一足飛びのように超越論的現象学へ至る道を取るのではなく、学問批判および経験的世界の存在論を介して超越論的現象学へ至る道を取るものと言える。そして、その道は、フッサールの最晩年の集大成の書である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（『危機書』、1936年）へ至るまで成熟していき結実することになるものと言える。

ミヒャエル・ヴァイラーは、1919年夏学期講義「自然と精神」と『危機書』の関係について具体的に詳細に言及してはいない。そこで、本論は、これから、『危機書』における学問論との対比において、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論の意義を考察することにしよう。

フッサールは、『危機書』において次のように述べている。「『省察』のデカルトのエポケーへの単なる熟慮的沈潜によってそしてデカルトの偏見や錯誤からのデカ

ルト的エポケーの批判的純化によって獲得されるものと考えられる)〈デカルト的
道〉と私が呼ぶような私の『イデーニ I』における超越論的エポケーへのはるかに
近い道は、大きな欠陥をもっているということを、私は付言する。そうした大きな
欠陥とは、次のような事である。つまり、デカルト的道は、なるほど一足飛びのよ
うに早くも超越論的エゴへ至るが、あらゆる先立つ説明が欠落せざるをえないので、
この超越論的エゴを見たところ内容の空虚なものに見えさせるのであり、ひとは、
さしあたり、デカルト的道によって何が獲得されることになるのかと途方に暮れ、
それどころか、どのようにしてそこから哲学にとって決定的な新たな全く新種の根
本学が獲得されることになるのかと途方に暮れるのである⁽¹⁴⁾。このように、フッ
サールは、『危機書』において、『イデーニ I』(1913年)におけるデカルト的
道との決別を明言し、学問論および存在論を介して超越論的現象学へ至る道を遂行す
るのである。

フッサールは、三部構成になっている『危機書』の第一部「ヨーロッパ的人間の
根本的な生の危機の表現としての学問の危機」において、単なる事実学への学問の
理念の実証主義的還元つまり学問の生に対する有意義性の喪失を学問の危機と呼び
⁽¹⁵⁾、その危機を克服する手がかりをヨーロッパ的人間の自律性の根源である古代ギリ
シア哲学ないしプラトン主義のもつ理論的自律性および実践的自律性に見いだし
ている⁽¹⁶⁾。しかし、そうした思想の原型は、すでに1919年夏学期講義「自然と
精神」のうちに見られる。その講義において、フッサールは、次のように述べてい
る。「人間的生全体を合理的洞察の上に基礎づけ、それゆえ究極的に厳密な学の上に
基礎づけるという、ヨーロッパ的人間のさらなる運命を完全に本質的に規定するこ
うした理想ないし原理の構想は、もはやプラトンという名前と結びつく⁽¹⁷⁾。『危機
書』の第一部で展開されるような「近代的学問としての実証主義的科学への学問の
理念の限局化への批判」という学問論の原型は、「アポステリオリな経験的科学は、
その骨格を成すアプリオリな形相学としての領域的存在論を介して遡行的に至る現
象学によって基礎づけられねばならない」という学問論の形で、すでに1919年
夏学期講義「自然と精神」において展開されているのである。

また、フッサールは、『危機書』の第二部「物理学的客観主義と超越論的主観主義
との間の近代の対立の起源の解明」において、超越論的哲学が前学問的ならびに学
問的客観主義を基礎づけることを説いている⁽¹⁸⁾。しかし、そうした主張の原型は、

1919年夏学期講義「自然と精神」のうちにすでに見られる。その講義において、フッサールは、次のように述べている。「あらゆる理論的形成体の意味には、徐々に解きほぐされ間接性を追究しつつ最終的には直観へ連れ戻されるということが属することは、明らかである。それゆえ、一切の理論的思惟に先立って存し、学問的研究にとって基底として機能する意味内容をすでに前学問的意識において対象としてもっていたような直接的に直観的な世界の対象を、我々は指示される。……我々が、前以て与えられた世界の類型的構造へ入り込もうとすれば、我々は、我々がもつともなことに主観と事物との間の区別と呼ぶような第一の区別に突き当たる。しかし、完全に明瞭に貫き通すためには、我々は、きわめてラディカルな問題を立てる。すなわち、認識する自我に前理論的なものとして前以て与えられるものは何か、という問題である。我々が前理論的に世界として直観するものが一切の前所与性の成素であるにすぎないということは、おそらく明らかであろう。そして、一切の所与性の成素の特性を描写しその他のものの機能を理解することは、とても重要である（我々が今研究しているものは、〈超越論的感性論 [Transzendente Ästhetik]〉という題目をもっている。）」⁽¹⁹⁾。『危機書』の第二部で展開されるような「超越論的哲学による前学問的ならびに学問的客観主義の基礎づけ」という主張の原型は、「理論的形成体を産出する学問は、前学問的な直観的な世界によって基礎づけられ、前学問的な直観的な世界の存在論は、さらに超越論的感性論を介して超越論的哲学としての現象学によって基礎づけられねばならない」という主張として、すでに1919年夏学期講義「自然と精神」において展開されているのである。

さらに、フッサールは、『危機書』の第三部「超越論的問題の解明とそれに関連する心理学の機能」において、「(A) 前以て与えられた生活世界からの遡行的問いにおける現象学的超越論的哲学へ至る道」と「(B) 心理学から現象学的超越論的哲学へ至る道」というように区分して、前者の「生活世界の存在論を介して超越論的現象学へ至る道」⁽²⁰⁾と後者の「心理学を介して超越論的現象学へ至る道」⁽²¹⁾を展開している。しかし、そうした二つの道の原型は、1919年夏学期講義「自然と精神」のうちにすでに見られる。まず、『危機書』における「生活世界の存在論を介して超越論的現象学へ至る道」に関して言えば、前述の1919年夏学期講義「自然と精神」における「前学問的な直観的な世界の存在論の超越論的哲学としての現象学による基礎づけ」が、まさにその原型である。また、フッサールは、1919年夏学

期講義「自然と精神」において、「直観的生活世界をその具体的類型において相対的に持続する存在形態および生成形態から見て記述し、直観的に汲み取られる諸概念において私にとって確定し徹底的に知るに至るといふ必然的課題」⁽²²⁾に言及しているが、これは、まさに『危機書』における「生活世界の存在論」の原型に他ならない。それゆえ、『危機書』の第三部（A）で展開される「生活世界の存在論を介して超越論的現象学へ至る道」の原型は、すでに1919年夏学期講義「自然と精神」において展開されているのである。次に、『危機書』における「心理学を介して超越論的現象学へ至る道」に関して言えば、1919年夏学期講義「自然と精神」におけるフッサールの次のような論述のうちに、まさにその原型を見いださう。「物的事物性の現象学 [die Phänomenologie der physischen Dinglichkeit] は、もとより身体性の現象学 [die Phänomenologie der Leiblichkeit] と分かちがたく結びつく。身体性の現象学は、心的領域の現象学 [die Phänomenologie der seelischen Sphäre] にとっての基本的下位段階である。その際に、我々は、すでに次のような事に気づく。すなわち、現象学的に考察されるならば、世界の中の主観性(心的精神 [seelischer Geist]) と世界の中の物的事物性は、二つの区分された外面的にのみ結びつけられた実在的出来事のグループではないということであり、自己のうちにすでに感覺性および自由な運動性という或る特有の本質層をもつような身体性の形式において、ただ精神性のみがそれによって自然のうちつまりピュシスの領域のうちに位置を占めうるような或る結びつける橋が、作り上げられるということである」⁽²³⁾。この論述において、物的事物性の現象学と心的領域の現象学は、身体性の現象学を架け橋として結びつけられる、ということが説かれているわけだが、この論述のうちには、物的事物性の領域に存立する存在論が究極的には生活世界の存在論を介して超越論的現象学へ至るとの同様に、物的事物性の領域と必然的に並存する心理的領域に存立する心理学が超越論的現象学へ至ることが含意されている。それゆえ、『危機書』の第三部（B）で展開される「心理学を介して超越論的現象学へ至る道」の原型は、すでに1919年夏学期講義「自然と精神」において展開されているのである。

したがって、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論は、最晩年の集大成の書である『危機書』(1936年)における学問論の原型を成すものであり、学問論的転回点としての意義を担うものと言える。

結語

本論は、まず、1912年の『イデーⅢ』における学問論が、物質・心・精神といった実在的な存在論的領域を構成的現象学によって基礎づけるという構図を設定するとともに、それぞれの実在的な存在論的領域に存立する実在的な諸学問を現象学によって超越論的に基礎づけるという枠組みを確定したことを明らかにした（第一節）。次に、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論が、可能的諸学問をアポステリオリな経験的諸科学とアプリオリな形相学としての領域的存在論に区分し、前者の骨格を成す後者を現象学によって超越論的に基礎づけることによって、厳密な学問体系の創立を企図するとともに、物的自然の存在論および現象学の基本路線に関して、具体的事物ファントムの存在論を中核とする「超越論的感性論」の導入によって、「存在論と現象学の架橋」を学問論的分析として具体的に遂行したことを明らかにした（第二節）。さらに、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論は、最晩年の集大成の書である『危機書』（1936年）の学問論の原型を成すものであり、学問論的転回点としての意義を担うものであることを明らかにした（第三節）。

注

- (1) Edmund Husserl, *Husserliana Bd.V, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Drittes Buch* (以下、*Ideen III* と略), hrg. v. Marly Biemel, Martinus Nijhoff, 1971, S.128.
- (2) *Ibid.*, S.129.
- (3) *Ibid.*, S.130.
- (4) *Ibid.*, S.77f..
- (5) Edmund Husserl, *Husserliana Bd.XXXII* (以下、*Hua. XXXII* と略), *Natur und Geist Vorlesungen Sommersemester 1927*, hrg. v. Michael Weiler, Kluwer Academic Publishers, 2001, S.XXVII.
- (6) *Ideen III*, S.99.
- (7) *Ibid.*, S.24.
- (8) Edmund Husserl, *Husserliana Materialien Bd.IV* (以下、*Hua. Materialien. IV* と略), *Natur und Geist Vorlesungen Sommersemester 1919*, hrg. v. Michael Weiler, Kluwer Academic Publishers, 2002, S.145.
- (9) *Ibid.*, S.145f..

-
- (10) Ibid., S.13f..
(11) Ibid., S.171.
(12) Ibid., S.172ff..
(13) Hua. X X X II, S. X X X IVf..
(14) Edmund Husserl, Husserliana Bd.VI, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie (以下、Krisis. と略), hrg. v. Walter Biemel, 2 Auflage, Martinus Nijhoff, 1976, S.157f..
(15) Vgl. ibid., S.3f..
(16) Vgl. ibid., S.5ff.u. S.12ff..
(17) Hua. Materialien. IV, S.4.
(18) Vgl. Krisis, S.101ff..
(19) Hua. Materialien. IV, S.19ff..
(20) Vgl. Krisis, S.176ff..
(21) Vgl. ibid., S.247ff..
(22) Hua. Materialien. IV, S.187.
(23) Ibid., S.185f..

【追記】本論は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究(C)の成果である。

(ほり・えいぞう 大分工業高等専門学校一般科文系教授)